

ほ	へ	ふ	ひ	は	の	ね	ぬ
星空通信	変身願望	不老不死の男	秘密の小屋	箱の中は？	ノリ・メ・タンゲレ（私に触れるな）	猫の手も借りたい	塗籠の一夜
133	125	113	105	93	85	77	67



に	な	と	て	つ	ち	た	も
ニライカナイの料理	悩みごと引き受けます	図書館	定期券	追伸	沈黙の夜	黄昏となつかしい敗北	くじ
55	47	35	27	19	11	5	



七月の太陽が朝から眩しく輝いている。
蝉も鳴いていた。

天気予報は快晴、真夏日になるそうだ。

「いつてきます」

ボクは仏壇に手を合わせる。

遺影の父はだいぶ若い。

ボクは父の顔を写真でしか知らない。

ボクが産まれてまもなく、

事故で亡くなったと母に聞いた。

それからは母と二人暮らし。

ドアを出るボクに母が声をかけてくる。

「いつてらっしゃい。頑張つて。」

仕事が早く終わったら、

応援に行くからね」

「大丈夫だって。無理しないで」

七月に入り、予選がはじまっていた。

ボクにとっては最後の夏だ。

ボクたちはノーシード校。

這い上がるように勝ち進んできた。

今年は昨年よりずっと調子がいい。

チーム全体の気持ち盛り上がっていた。

あとほんの少し頑張れば、

甲子園も夢じゃない。

ボクが野球をはじめたのは、

「お父さんは野球が大好きだった」と、

母に聞いたからかもしれない。



まだ幼い頃、使い古されたグローブを、
ボクに見せながら、母はそう話した。

「あなたとキャッチボールできる日を、

楽しみにしていたのよ」

父のグローブは大きくて、

ずっしりとした重みだった。

父が傍にいたような安心感があった。

しばらくの間、

枕元に置いて寝ていた記憶がある。

ボクは野球部に入った。

幸い、友だちや環境にも恵まれた。

気づくとボクのグローブも、

父のグローブに負けない大きさになった。

疲れた。

ボールを握る手に力が入らない。

1点リードで迎えた、9回裏。ツアアウト2塁、あと一人だ。

ウィンドアップからキャッチャーミットに目がけて投げたボールは、
快音とともにライトスタンドにスローモーションのように消えた。

高校最後の夏が終わった。

疲労感と虚無感でマウンドから動くことができない。

そんなボクのうつむいた背中を

みんなが、労うようにポンと叩いていく。

気がつくとき大きな声援も消えて、

静寂の中にいた。

ふいに肩に手が置かれた。

「ここまで、よくやったよ」



ふり返ると、そこには

写真でしか見たことのなかった笑顔があった。

「父さん？」

ベンチへ走っていく父の後ろ姿を

黄昏が包んでいく。

涙が止めどなくあふれてきた。

あれからもう二十年。

久しぶりに来た球場には、

なつかしい風が吹いていた。

あくむとしょかん
悪夢図書館

ち

沈黙の夜

村に隠された秘密とは

